

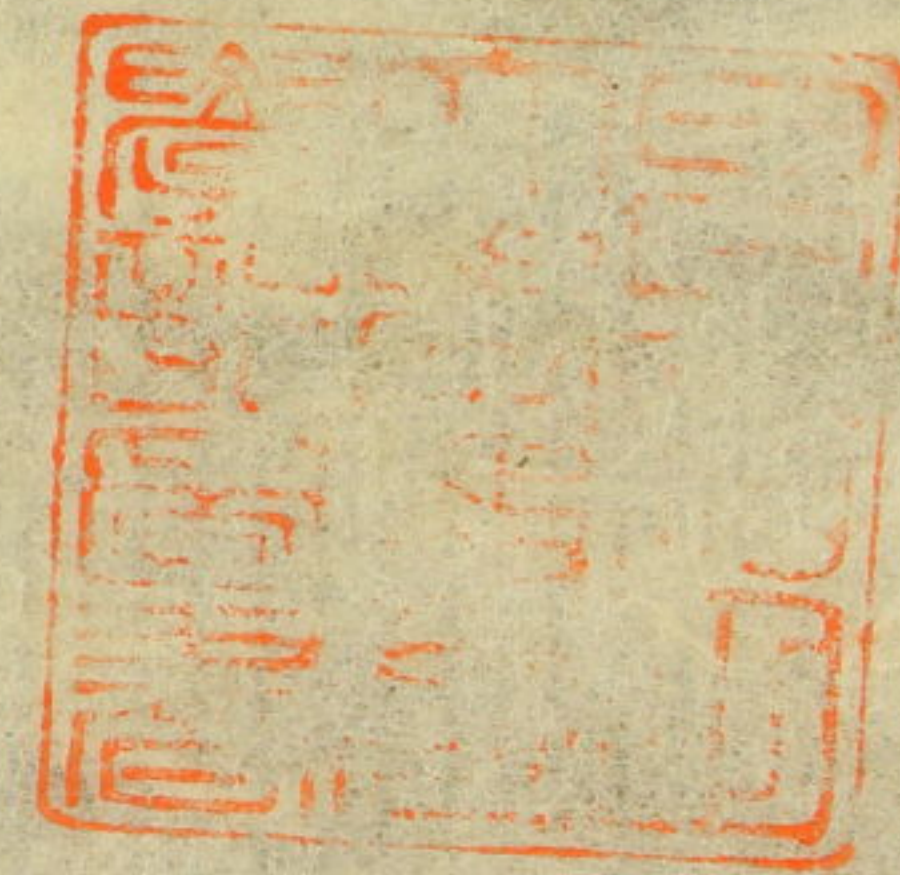
正史
実傳
いふは文庫
十五

~13
4307
15



八13
4307
15

2
250
15



千稲田大學教育學部



<2000-3> 16100

正史せいし實傳じつでんいはは文庫ぶんこ十五篇ごじゅうぱん叙ぎょ
 梅檀ばいだんの林はやしふく時ときの夜よ月つきく芳よしと
 實じつ也なり四十七しじゅうしち士しと徒と穢せう大だい我が擔たんハ
 今いま又また小こもももも思おもわねないい家か族ぞく
 烈りつ婦ふ何なに又また從したがふふ我が僕ぼくのの想おもひ
 原武げんぶ林はやし母ははのの如ごとくく又また小こ伏ふせせとと

属^{もがま}武^あ河^く岡^あ也^ち松^まが僕^が小^く元^し助^す甚^ま二^だ申^え
 何^なれ^ん。俱^{とも}忠^{ちゆう}死^しと遠^{とほ}今^{いま}と其^{その}化^{くわ}る^ん
 許^{あま}多^ま何^な統^とじ。更^{さら}中^{ちゆう}も嫉^あ毒^{どく}り^まま^ら。
 女^{をんな}の道^{みち}成^なじ^やう^じと^し事^{こと}小^こ能^の々^々
 駭^{おどろ}ひ^ん真^ま女^{にょ}又^{また}又^{また}と云^いふ^はな^らば^な。殊^{こと}々^々
 友^{とも}鳩^{たづな}の乃^の成^な家^け々^々。一^{いつ}世^{せい}の秀^{しゆ}吟^{ぎん}

抄^{しやう}う^うら^らび^び然^{しか}る^るに^に這^あ編^{へん}中^{ちゆう}中^{ちゆう}小^こ々^々
 十^{じゅう}内^{ない}を^を妻^{さい}小^こ端^{たん}々^々の^の敷^{しき}通^との^の毎^{まい}々^々抄^{しやう}
 出^いし^しる^るに^に真^ま情^{じやう}の^の細^こ中^{ちゆう}々^々成^な端^{たん}切^{せつ}
 此^こ為^な小^こ示^し々^々と^と然^{しか}と^と有^あ友^{ゆう}々^々と^と一^{いつ}々^々
 味^{あじ}ひ^ひの^の事^{こと}々^々々^々

東都

為水春水誌





寒梅や
もえゆぬ
おのゝ枕

いろは十五口ニ



介
異形
の武上
許多
言
忽地
捕へらるゝ
後
頼文小妻

八百屋
傳



高の出入高容
八百屋傳
夜火
思ひ
屋浦小異
後
のあり

植住
の形
合

3
07



後の世に
顔なり
霊達

正史
實傳
いらは
文庫
卷之四十三

江戸
為永春水著

第八十五回

備もお針の由良の物オキミ美顔ミガハふるふと頼たのしのしりり育尾よくび
く性せいげげばばとと十じゅうああのの獲と矢やのの金かねふふるる支し也也獨ひとり々々心こころふふ
飲のびびててああるる夜よああのの酒さけ青あお成なり用もちええるるせせとと推おしてて
孫まごたたららがが初はつ屋や小こいいりり程ほどのの花はな子こ成なり親おやふふれれとと獨ひとりりり
淋しみげげふふ火ひ屋やふふりりととねねてて居いるる体てい也也陰かげ子こ成なりめめてて内うち



大うト猪は皮取て二之查続けく猪の春むやふ
 汁一トヤ、私も此しお合は仕ませうト申す孫一ト申す
 は身アそんを面外さるるととるより猪りが播きサ何
 ろうと申す一聞く仕るせくも砂を春むうう計アサお若
 えもめいすの一聞くも私も追原く仕方があうう折
 角一トお春うと思つておてあこのお聞て此けと
 何んまうごまエお若が春せぬとおんひの程程春く
 進るヨト言ひあうう孫たがすう春ぐヤ一と申す一

猪は皮のき取り 取くグイト春む 孫一ト申す 此れ
 春うけさる汁一トお若の春うげの方があい一いノサト
 尻目お十分猪を合んで孫たの程程あううと申す
 遠方へ一向のつぬ体うて孫一ト申す 是も思ふ
 えんううお若のを猪はく春むせくは又ア面何と
 うて茶碗お出ると湯春成出るとく白飯で食くと少
 餅のをも運うううト思へばお汁の態と止めど猪立六
 おうとむけくわん 餅 扱 喰ふううと此 汁一ト申す

見る大きな物も何ぐりてい毒小なりまさア子いお猪尾
 進るうこれおあさいヨト言ひてそらく孫の例(幸)
 家ねば孫左ハ位あきり成高きら孫コレサをんる小例(幸)
 来て呉るえんははア女 髪あはれの白ひや白粉あはれの白ひ
 と喚ぐし狗あはれが悪くあるらう升あはれヨヤまきまい物あはれごま
 史これトおま前あはれえんハ女あはれハお嬢あはれひ之あはれ孫あはれハ嬢あはれひの位あはれ極あはれの
 嬢あはれひサあはれも他あはれ極あはれハ玉あはれ件あはれ小あはれ居あはれて附あはれ分あはれ小あはれも女あはれ房あはれと持あはれて
 るハト進あはれる人あはれも何あはれれとも女あはれといふ若あはれハ何あはれぞ
 下ハ五上ハ一

権者ののぞうらうらう、世に多いで此年まどく権者で
 御せこのサ升あはれハ喉あはれくそりあはれやお内あはれ美あはれんハお持あはれきあはれらうらう
 知あはれらるいけれと見あはれ進あはれ方あはれの女あはれ成あはれ速あはれのせあはれてお在あはれたさうらう
 遠あはれひへるいヨ史あはれとも女あはれの例あはれへも考あはれつて度あはれもおああはれり
 るいの孫あはれト考あはれそんあはれみのサ升あはれハおまあはれまあはれんあはれみのめあはれか可あはれ笑あはれ
 一あはれのまあはれお考あはれさんあはれぞうあはれくあはれ本あはれの役あはれうあはれせあはれねあはれこのでもらあはれゆあはれる
 みるまあはれんあはれらうあはれはあはれてハ嬢あはれひあはれごとあはれハ件あはれさあはれけれあはれどもまあはれんあはれぞうあはれ
 吾あはれでもああはれの考あはれをあはれまあはれいあはれ秋あはれの口あはれらあはれハあはれ云あはれひあはれやあはれりあはれかあはれおあはれ考あはれえあはれの

指^さる^る望^{のぞ}い^いお^お方^{かた}と^と一^{いっ}生^{せい}連^{れん}係^{けい}の^のう^うら^ら池^い子^こ浮^うき^き成^なり^りた^たら^らう^う
 ら^らう^うで^での^のし^しど^どん^んる^るふ^ふま^まが^が女^めの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 ま^まで^で下^{した}言^いひ^ひの^の孫^{まご}の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 寢^ね返^げけ^け孫^{まご}一^{いっ}男^{なん}女^め七^{しち}才^{さい}の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 教^{おし}へ^への^の座^ざ敷^{しき}の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 奥^{おく}の^の性^{せい}け^けの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 多^{おほ}く^く白^{しろ}足^{あし}つ^つの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 二^{ふた}年^{ねん}あ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^うの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 計^{けい}の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ

計^{けい}の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 一^{いっ}計^{けい}の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 お^おま^まの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 後^{のち}と^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 の^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 う^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 春^{はる}む^むの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ
 撫^なで^でる^る苦^くの^のう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あひ^ひ



孫次郎



笑の纏ふ女と
 食の錦の裏ふ
 針の色む

おちんち

いづれに何れ何れも後と云ふ其のいふハト是より再び
 春にやに余様解ひしる松子也くさくさくとい言
 らんと云ふおのりいむりお郷も懲りむ例へありて
 針目孫まん後とおいふ悪いか子先刺おがらぬと云
 を行とおいふのむ一様へ行ともすぬが余り流らぬ
 思ふく針目いよもあんな望の度を言ひておを
 さるヨにねごもくしくおおん思の度と思はざる女
 はうわわいの度と言ひ出さるのをあつてあつての成

はうわわい不後とて思ひてお長るさるな孫も女の居候
 候はるいこの男の名折ととりよふかあるいさうう款され
 とし思ひておのまをりおるておるさるさるまんごら
 悪くもあつていとおあるもあつてくれ掛せや
 孫たのい船気愛りおれいおいおいおいおいおいおいお
 十と足らるがを修廊下へ実出へ孫一様へおの酒者
 おくおれとおいひるがう言ちりしる血砂洋とも俱ふ
 廊下へ実をりうく懐子ひりり一切おけおけおけおけ

出さうとした廊下でとつて尻餅つた櫻枝あさくおー
 くと家内の者も森あづまりしあやけ物あはれつつけ出て
 来る者もあつたが人ふ知れて外はつらつらと痛む
 櫻とびたてあつたあはれつつけ出て
 取所あつたあはれつつけ出て
 さらさらあつたあはれつつけ出て
 二十あのもうふもつて四立あもつたあはれつつけ出て
 酒成香まればげくの果がけねる痛い思ひをさせられ

ていぼつともうまる布がまのトまつくは後あつたあはれつつけ出て
 何んまりあつたあはれつつけ出て
 熱くはとげつたあはれつつけ出て
 ともあつたあはれつつけ出て
 喉とあつたあはれつつけ出て
 目形のはつたあはれつつけ出て
 金の粒のまはれつつけ出て
 平あつたあはれつつけ出て

本姓違くも思按成定めつ航と極おはつきしとぞ

第八十六回

次の日お針の由る之助の例お人おたおを窺ひしり
近くうしあそく針お目おさぬお約束の通り
お誓いと預きうしおごなまじし中アウまじり前
尾よく孫ためお居極成極おころ針ハイえるおろ
大骨をおすしししや。まの天手極おのし保那奴
るく片急地おごころはいお後しとまごの性る

ろさらうが竹拍しお極お言ひくけしり此後の扱
子成お安しと叫しと歩せて呉をこ云りせとお針の
為にのしお針おまお関極おはし何と云ふ
ての出来まのしとぞまじりうしお極お持ておそ
おめらるうそあしは喜をうしと見まじお極おま
なるうし言ひて極お持けおもごごのまじり何れも
酔りせらるいお良しと思ひしし思入極おまじり
はての望いまじりおつても酔いおまじりおるの物ご

見まして後少く先くも成由と申すは又羽衣の
 暁も初命が古くはあて異なりと申しませうけはあふ
 性けはましくも若ふは是れ成由のまきをひりござい
 ませんく竹傘は河津の山鷹のくく小骨折候も
 係く頂きたる物と申すは「ア」史経を尾より
 為おせこのお行殿まの襟首成おんて実出され
 廓下で折んで腰をさうり痛むるのぞト問はれ
 お針の行成は「針」田。若若竹折してせんまをさうり

こゝろ
 此のトのぞござい申すは「ア」史経を尾より
 午あまの金成由と申すは成由のまきをひりござい
 殊に相おののをりの偏屋共ぶらうとんをまをさうり
 実をけ身がまをさうり居るがおぬがまをさうり
 那奴が一向お受はけるいば後をさうり折子の可成り
 吹かすの成由と申すは「ア」史経を尾より
 ト言ひましくお針のむのギツクリ流るふ面月よりせん
 春めくは「阿」史経を尾より

て孫ならがは多くて我孫イヤモと怒りあひ計ト申
まじき者も甚だ不仕ゆる者ぞくまひまきうり
由トレサ孫左殿く様お
何れそんまをせよとのぞ孫イヤは女ハ一体好上の
能くまの若しそんぞく存りまじき知照後私於を
まじく角のく書のぞくまひし法書は物語り孫イヤの
拾ひ能い歳と致しそ者おこし海ががらりの成中
掛まとうとうの四指手の若者あいらりやうるを致と致

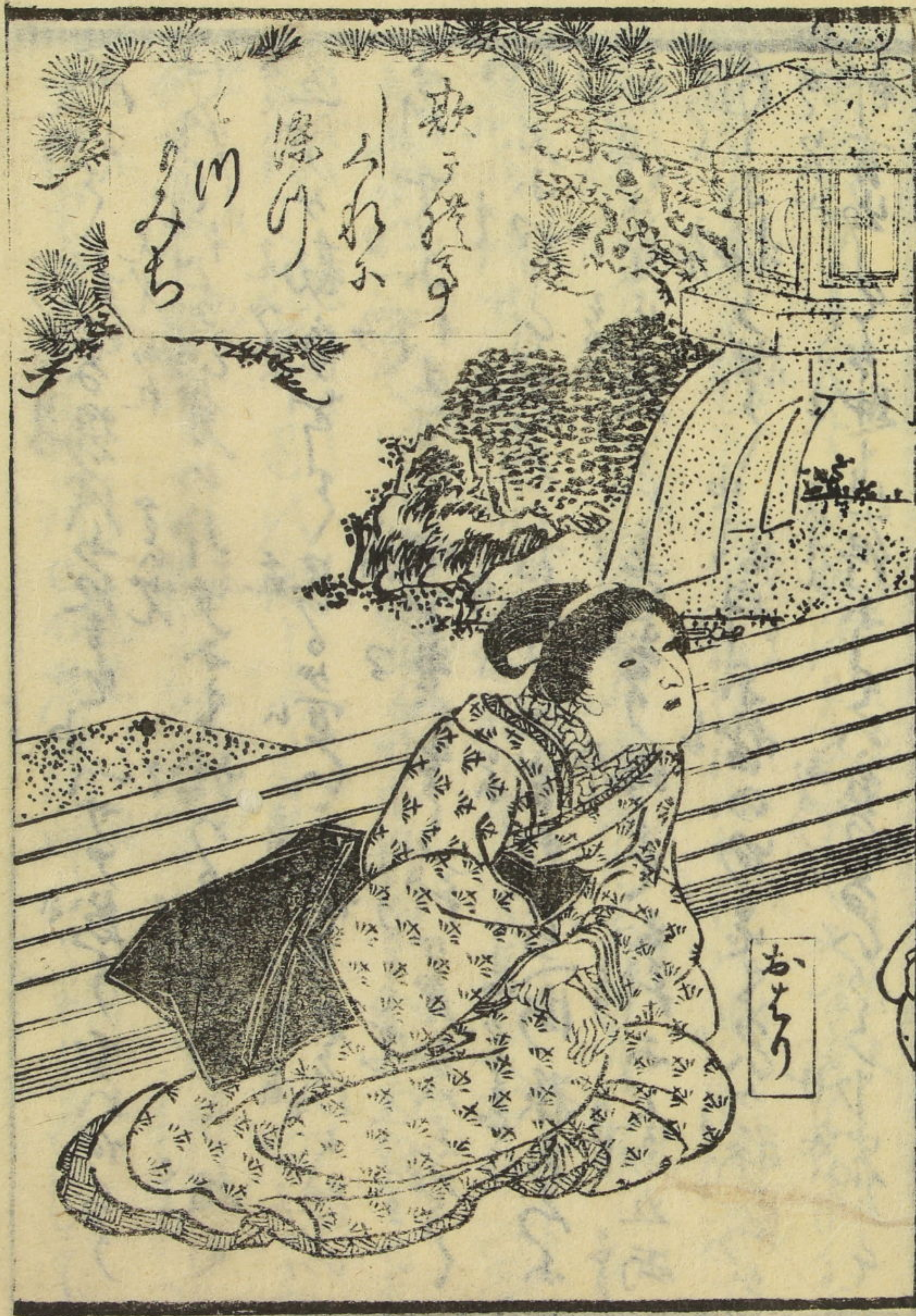
さうも知れませんうりお孫お返出まじきおはひのまじり
宜しうござんせト言われくかゆらぬのぬの園にゆえ
頼成様を由る程及程なりかまがまが伏がイヤサ
何も飲のぬりとも多くぬんの戯後おらぬまをあらう
い後た相お不他法を致を候もやうな中うに
叱りおらぬまらうぞらぬり孫イヤイヤまのまをぬ
おはひお家の取締り成致と申しおはひおはひおはひ
まじく筒指するおはひおはひ成致と若くおはひおはひ

十あの子供は成世の受んとせしと我が又立寄る
ままをとりつるは物徳は孫イヤハヤ果れで物か
中これせんを君はを四下第のお方ごのあざい
まーえんごがむが抗議とせも入替つのでございま
せうう詰りの思しを度おつけても悔いのはいお汁め
候令は姉の作おも一あたねを變へ出せませんといふ
つれ苦成女の身で大様おも今疾の中も孫は
のん成感ハさうとあさのころは身おらんし和しの

られ成面目さといふ思ひもせははねを程
出候まを念うらうい何れまを世々の和成
又の知れ多の憐れごと下苦りきりて白眼はれ
孫をんるお怖の顔成おあざうりなるお前
おれて性々の酒成香作してあよるおんし松
だつてお命が救いのあつて仕つけ仕まるの
為きくるあさうと云々を只候されお前と
終んを痛いのひまをるこのが和まのよおん

先とり不恨と申さるる物と申すに宜い申。またこの内なる
で日の照り申す高き竹知(竹)に付ても常り高の給合れ
世より申さる物と申さる物と申す申す申す申す申す申す
お是かとい且知が若葉お若葉はみちと言ふは因が
何知の何お物り申す申す申す申す申す申す申す
事多言小文のよひお申す申す申す申す申す申す申す
お成り申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
後お申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

出る候の度と申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
汗(汗)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
女(女)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
孫(孫)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
打ん(打)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
孫(孫)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
う(う)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申(申)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申(申)申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す



歌三行
の
あ
ら
ま

おとろ



孫三郎

おとろ

けられど行ふは身の外すも拘りて後さ
 立らが勸奇をとり異のうが宜いと誓りし所の熱の
 之のやうふ行ふも惟と昔く計が月かへさぐり
 けられど行ふは身の外すも拘りて後さ
 立らが勸奇をとり異のうが宜いと誓りし所の熱の
 之のやうふ行ふも惟と昔く計が月かへさぐり
 けられど行ふは身の外すも拘りて後さ
 立らが勸奇をとり異のうが宜いと誓りし所の熱の
 之のやうふ行ふも惟と昔く計が月かへさぐり

本言出せり申すは後ふと不直れあへり
 内を小振せく申すは不直のゆゑもあらば
 納得とて云はれざるをせきり臨むと
 申すは不直のゆゑもあらば

申すは不直のゆゑもあらば
 申すは不直のゆゑもあらば
 申すは不直のゆゑもあらば
 申すは不直のゆゑもあらば
 申すは不直のゆゑもあらば

東 故多し 暇と事なく 人の程 親りて 莫も何んを 孫たふす
も 知れざる 何れも 中島の 柳が 町房と 傳へし 傳ふ
月と 海を 取つて 追出せし 不流石のお針も
今夜と 知れば 葉お遠り ば 處より 何れに 指さる
徳と しかの 備作 小物 倍々 文徳 白磁を 大筆も
知らば 成せし 事 是れ 我に 多し 多し 多し 多し 多し
思ひも 多し ばと 仔細 事し 出ふ 徳も 案も 一書
送りしが 奸智 小案 備作 柳大 是が 後居の 指子 小

知れ 休む 居る なるん 鳴呼 難い なる 大筆の 若針
云義と 解し けり 町房 成り 他 小積 札 知れて 歌
の間者 の 身 月 成 防ぎ 又 及 間 の 方便 と 役 けて 親 方 の
義士 の 志 操 成 操る 只 其 の 父 の 事 ば 一て 子 是 力 亦
も 親 不 び けり 仰 面 不 強 弱 の 色 と 形 六 式 五 持
里 の 酒 不 耽り 迫 取 の 處 女 と 其 の 子 じて 何れ 五 取 浮 居
立 ち ね ても 本 包 敵 坊 ぎ ざ ね ば け 経 出 針 が 被 たり
取 落 したる 反 古 の 指 不 怪 した 文 件 何れ 何れ 志 死

父ふんせしお由らぬも為てよりお計を不審お
思ひ一丸の方後おく退おせり多然の力添の程く
なるお小銭れらる中光おのち捨しりる者のか顔
とて思もかりるる縁結し水は身を公をさる者おの縁し
公をし死生候るお何時し情眼およりし捨す成由ら之
跡の世すはと文お尋く気色多く是も一時の衆略と
思ひお捨後のおくさく人同お直も厭ふ直も世るの
悪件多くる此親里の内掛合を子の外お衣類

あつた方多くお當して生候不通の約束よく
お捨お順を有るせり不直り衆か親しりる者の編も
紀世多く同土八幡在るる新村の百姓おく佛小平し
佛多成而し正徳一圓の糸なる左極頼がましは夏ハ
さう有り莫大なる重根衣類を捨くもたふお行衣
はしと再之辨おど安入るけれはりのおを交頂と婦と
は有りおぬしは主人の流を姫おの娘もも多拙者
然とも御も夏はるいと世間のお糸も帰らば怨角より

うち月満く、男子如生あけし久小平が飲ひ大舌を流置
大切小舌のひらき後力強が能言浅射く切腹を乞ふと
少くともお控へ海へ脱ぎ無く終ふ尼法師と妻を
愛し大星就子の亡海流以替弟ひらると免供まじ
お控が産一子お控も小平お男子のうらば成長の後
竹成綱久大星方よりあはし書あくと許多の国徳浅賞
頼へその子孫連源とて今も不那比おたりとらふ
正史 實傳 いろは文庫 卷之四十三

正史 實傳 いろは文庫 卷之四十四

江戸 為永春水著

第八十七回

今がまじし由る由之由へ京洛おたりとて実本の松子と高橋お
頼ふととも最孝款の用知もかへる急換ははしむらふ
巧方の用急替ひこれバ附けらねと独びてその身も
けり実本入りつたのちなるれはあくと多舌浅定お
しとく将を海流先下とて徳念お承りて老不安快

させんと思ふおど誠寺十内と信信不修懺と未嘗と云ひ
梅つて花洛山科と叢足かきし心今も十内方六
始お修ふと懺がれ一が俄お痛お侵おて終お付終
世済去りさるおお續きく先母之也死比者よりて
袖も乾ぬうちられど疾石心の十内も須臾も終縁
做さき母うさく妻のお丹お竹の妻など細女お云ひ
建しとカ強し信お出さるおを終くの女もへ始お
おこれ始成先もて今もさ史と縁を哀別離苦の

悲しと云お行おかりつらうんさるお死別をうり中別れ
絶無一死はしし常言おさるお多々お是ハ一徳別をそ
ハ亡有竟の源末お念よ日ハありとも又再會のたもなき
さう終へ絶も入るべき妻も成貞烈を頼のお丹也一詞
一備眼おおと史の首途を終く信お常んて出
さるしハ又有がた賢女とりよべ一是よりお死せし
十月が昔妻やりの途中おての海放し冥ある途花の
間お妻お縁うし救道の夢の中も要し思つたを撰く

抄録の世にたりは文飾の味ひも支那の中実
情の成者友誼一く奈まじり

十月庚子和が音妻りの紀行和歌一卷系都より
妻方一実より贈り

□ 深十五のしねをましくつづま路ありのま
おれより終と初らち海さか後川の

水のけりともむのふさち共し

ゆふ坂と裁えそく

まじりくも又さよふ坂と新まう孫り

たぐいやせまじり四子山熱え

志賀の浦より

古よりかくてや人の信をぬらん

むしりきりけた志賀のうら松

都の元まじりよ遠ざるまじり

ゆもさよまじりあり大むえの

ふもかくまじり跡のあま雲

日く附雨降りけきぶ

別を泣くかひの雲のちかき

かふもあぐあく東路のそら

あふく極む歌の中ふ

よりく小都よ帰る人乃

教年しれなん身の新あふ

こそれゆね歌れをもあひく

屋外く人かたぐくも

吾妻にやうく尋ねる小婦たに友の残まるか

浦くかろむりれ村も枯く

霜ふ起伏をむきけ

結くあ人の昔妻ふ哀りふか

仙北又回中し妻名して

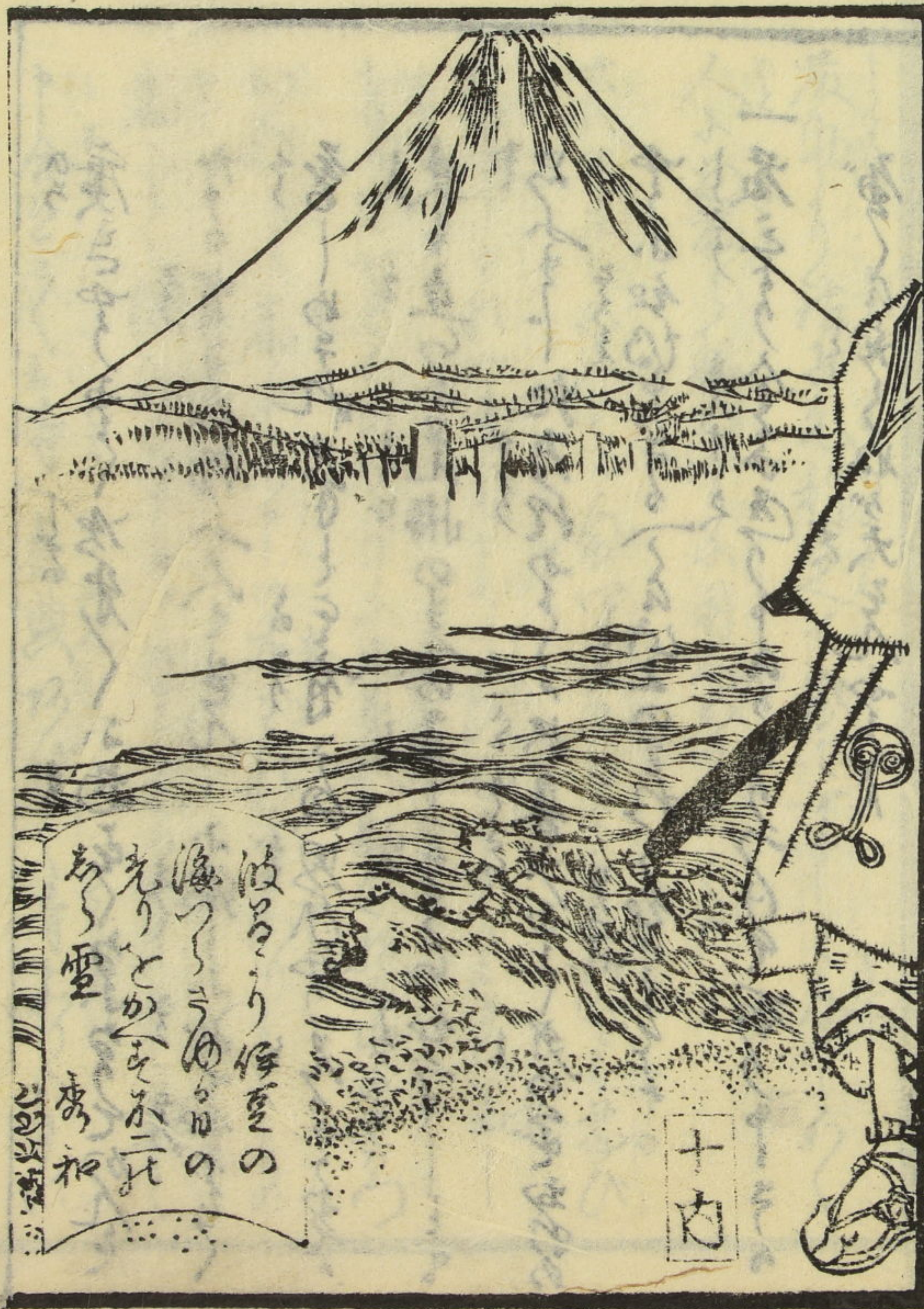
今合なり佛家の松子代親

婚りし女の肉を抄ゆ

一年中入らざり息女もく

役りも折くむりとも思ふありあては我等一服
をのりあくるまき先く公易うる處の幸ち
新言尚久更親の勤ゆもそくせよ
經小曰く大言の味者復名和久屋新言傳といふ
店小備宅一雄藩の患者となり仇家成家不事あり
十月の末あまき源右の才なり金に新言傳といふ
のりうき久吉更も間隙又勤ゆへ中村の
更と知るべし

一我等より十日たかりしは我も頼むに我
中へ進みあまの比の女共ありその徳を徳忠の
方たがのやうにまのあまの徳を徳忠の
勤くしと我等まの徳と勤ゆへに役り
中へ及ぶに幸あら
一お前よりしりし先の君小居にされりやこそ
きく心細小おしも四教一ゆりうと思ふまを
我等ゆへんまのう小在し小左具も今あるが
も



波のり修葺の
 海つうの日の
 光りとあまふ
 あり聖 あり和

十内



り
 小
 吾妻
 あり
 丈夫
 利
 髪
 額
 越
 力
 海
 逢
 坂
 山
 と

山見

いんじんをひきつりまくかりひきしり
一尾まをまのふの量人の遠くおろくおろく
夕夕英法屋より十五日六日の女二を居た
女七日おありはども我等居不知せふ
ありふりされは成つて居りぬ
ありふりぬ人ありぬ十六日迄の役り
路々々々通るるを地々々々
見しりそり下りみちのどくたの物下痛み

たりとあらくら痛むるを
廣安屋茶屋中へ入りぬ
昔は強その苦しみ
ありぬゆりぬりぬ
世代渡り事一行要の差
多しゆりゆりゆりゆり
べくゆりゆりゆりゆり
一二番ゆりゆりゆりゆり

中ちゆうのととくく勢せいを中ちゆうのととく 後助こうすけ授まかむと一ひと
守まもりて身みのと者ものりりと立たつりと不ふ察さつ東とう一ひと也なりぐと不ふ連れん有あり
とくとりの中ちゆうのととくとししのとすすひひとと中ちゆうのととくと人ひとくくんんににおおもも多たええんん
入いりてとりとぐぐをを踏ふんんのの事ことととななゆゆらら之のゆゆららののゆゆららののゆゆらら
余よ不ふ察さつ東とう一ひと也なりぐと不ふ連れん有ありとと同どうひひふふああるる人ひとののゆゆららとと換か換か授まかむむととももああるる
ととりとぐぐののゆゆららああるるととははととりとぐぐののゆゆららととりとぐぐ
一ひと十四じゅうし日にちふふ青せいままののりり也なりぐと不ふ察さつ東とう一ひと也なりぐと不ふ連れん有あり
かかららおおもも知しるるももああるるののゆゆららととははととりとぐぐののゆゆららととりとぐぐ

一ひと葉はのの光ひかり也なりもも遠とほひひももちちりりももおおくくととももおおくくととももおおくく
多たくく夜よのの月つきももいいれれぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ
とと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ
れれとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ
憂うれひひのの事こともも思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ
人ひと間まのの事こともも思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ
ううれれもも都みやこのの道みちもも思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ
流ながれれるる水みづのの事こともも思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬとと思おもひひぬぬ

幼れも年々く増りゆく年のむゆも感もあ
まゝに「あゝ思ひは」はくも残るも有様を
思ひつとくさるゝとあつてくも思ひあふのこ
とも心のうちともあつてせめて思ひあふれぬ
たの命のいのちのむゆ——とも思ひあふれぬ
こゝろの思ひあふれぬ思ひあふれぬ
一は今の秋よりさる遠坂の舟のりぬの——旅のりぬ
と念をえの秋さるゝ感——入る——中略 是の

ても心と捨ててはたはた下す心 秋とも
遠るる心とくちつちつと中へ心とあふれぬ
ゆゑに心とあふれぬ秋とも心とあふれぬ
ともあふれぬ心とあふれぬ心とあふれぬ
心のひますもあふれぬ心とあふれぬ心とあふれぬ
秋とも心とあふれぬ心とあふれぬ心とあふれぬ
まてをこりぬの春に心とあふれぬ心とあふれぬ
秋のりぬ心とあふれぬ心とあふれぬ心とあふれぬ

文終が南宮とてる中りにそと思ひつゝの男の
 てもなほてもそまふ公等も及らぬ事あり
 一交えの有様一日くしきし中の者ども殊更しき
 ぞくぬいさだしく是中の者たるは久き史
 我多年あやて万幸中命の朝日ふも芝布西は世
 今ふ旅をせりむり人の西は世し
 見おふあらしとくす中の肉の者もきて自ら何も
 かもさるあくはるき若とも肯お中我木老人とて

殊の介かまわがうくね夕の色ひまをよの星のなとも
 若た若たうくく医者もくくは北十層と付て十層
 括くしと中の若のか北も中の

按え
 若らふ十月の熱髪るじしすゆねの初りよきんら
 肯おら幸もきて酒香も肯吟ひて一日成るじかの
 とも若たの袖口も切せかり中の若もかく破生る人も
 惟お頼むむい方もうく今あ一の向しとひひの裏の
 ねらりびの今日幸もあ小纏のせ中の夜入るもよき物

ありなまき心易うまゝに元竹も帰りを待たず
 今もや竹あり事成すと思ふにわづらひて
 又くみきりて一人多くなまゝに成度あり
 思ふにまゝに返事をもせむ方あり
 著りてまゝと皆所成り
 入道の成り成り

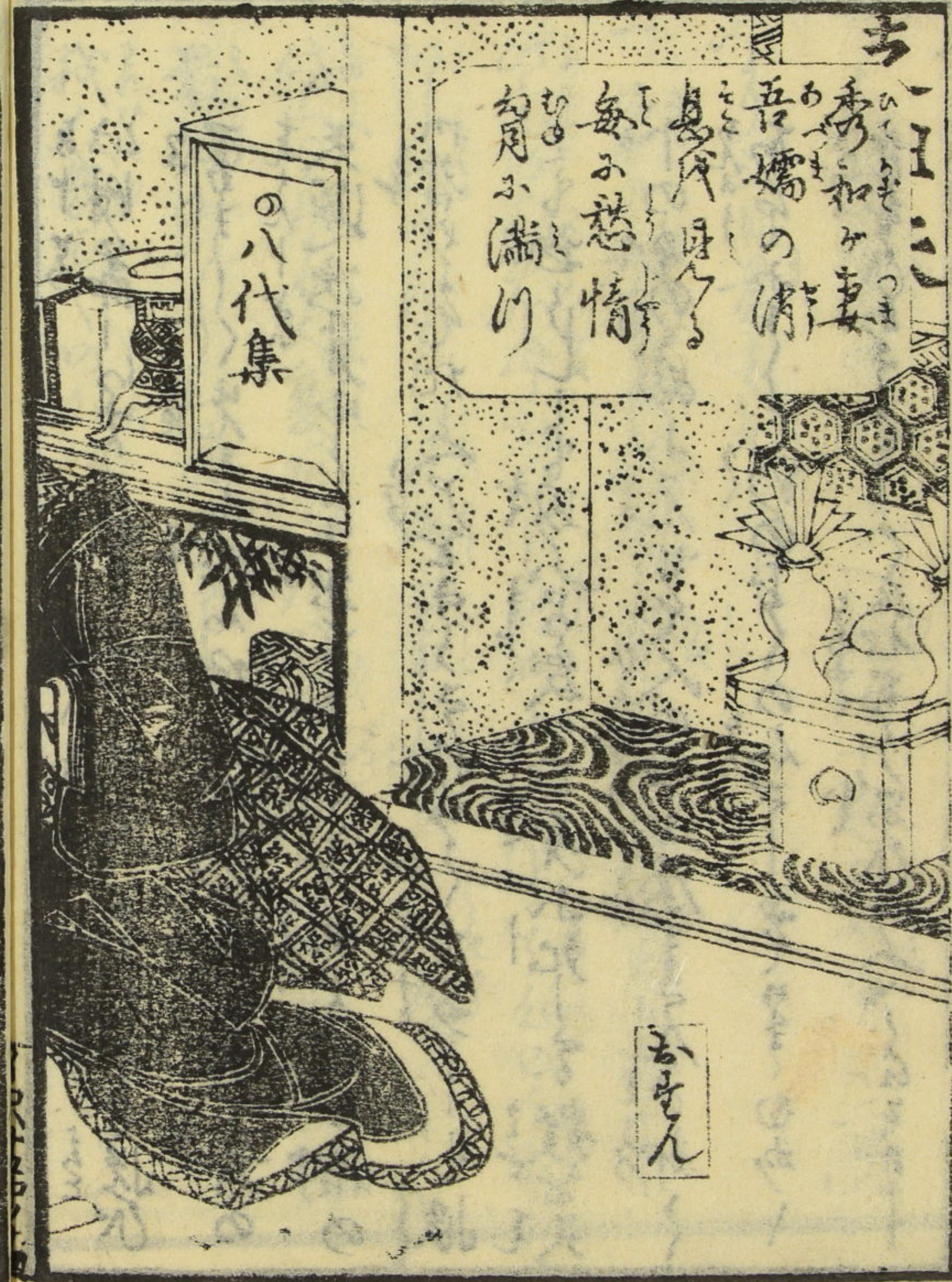
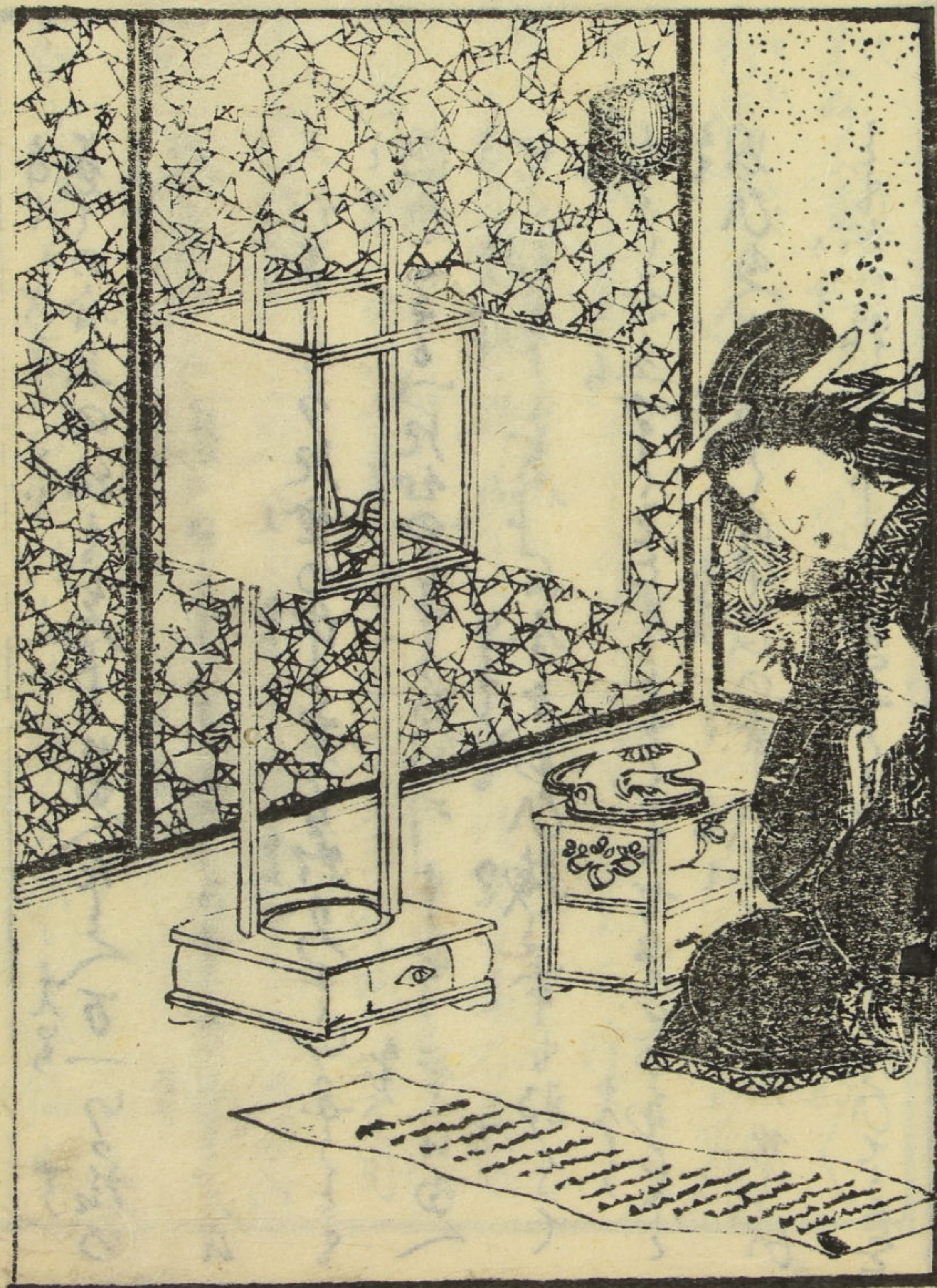
十一月二日

又四年

おせんとの

存心せしぬのちお粒散茶葉ゆれど清きうら
 もわり中略下略をせしぬもわりお字一
 大約約のどくわり紙頁薄小冊中お記一
 知るに粒具なる成初るまゝ欲せば吾田小冊
 書と表紙をせる古字本わり看友茶の
 一と安しれを知りあふべし

第八十八回



秀和の妻
 吾嬬の情
 身成母
 毎ふ愁情
 育ふ満月

の八代集

おせん

中合どくのむら成よりりきるる中畧時節も
迫づたゆりも錦も不仕成の中合せむと人多く
はみも我のふ二階へのがりく漸出ぬ人行方一も
あきり一ふの慶唐より下先西方寺不愛坊一
るれく程中の忍う院有るれく程中の行持
も一あり中一ふ下一下中の史少みもぬり成
うへへ海号たんきくき一丁中の見く慰
変り一あくはくもく人へ中川言事成尚

まのうせん後の事程入りし

五月十二日

あつら 十円

おせんどの

程く書上畧来代まを天下小名成去とと老ん事
御の南をとれおるびくそりト見ても端
く思ひのみふむいとせ先とくまをそり一名のう
とも是くあかりしをふはりよのたたるたうちん
沙流る

おせんのか一青たふ紀を

予は跡見ふ候の時而あはく

ゆひわへと書き言の禁もあ

僕這冬と抄録をい秋と写すふ三貞烈氏撰

ふ感ト入りそりふ候の信ふさねくあぢく書

と関く事あり巻と穿くの婦幼等十月支婦の

心の度成もしく汲もかんあかめあをいんせび

哀でよらびしり重の教ふ達く変るれ支婦刊

何の部を知らんり余りれ只その衆のし写さへ積

倦るづれまもりる下の巻あ十門が付入の目まを

案ふあかりし短き衆と抄出し例の信候の咄ふ

婦し一信婦お葉があ候の編出し一さありお七の

倉指金あが智勇の傳成綴らん

正史 いらは文庫巻之四十四

と言ふ事なり。此格の文ありし事なり。

十二月十二日妻へ贈る歌 附入の一日

十二日の夜玄溪を宿たす。此の夜小川を渡るの
事。此の夜最子に告ぐれば、母も亦く此の夜に
思ひをうつふあり。此の夜小川を渡るの
羽折る外おる具たう。此の夜は、此の夜は、此の夜は、
のがせ申の流史を何のく。此の夜は、此の夜は、
及十の夜く。此の夜は、此の夜は、此の夜は、

傷きあり。此の夜は、此の夜は、此の夜は、
若ふの夜は、此の夜は、此の夜は、
掛るの夜は、此の夜は、此の夜は、

十二月十二日

十月

おせんどのか

此の夜は、此の夜は、此の夜は、
此の夜は、此の夜は、此の夜は、

十二月十四日妻方（おつ）の御入りの日なり

かき（おつ）の御入りの日なり

折柳（おつ）の御入りの日なり

一合（おつ）の御入りの日なり

（おつ）の御入りの日なり

（おつ）の御入りの日なり

一（おつ）の御入りの日なり

（おつ）の御入りの日なり

中（おつ）の御入りの日なり
明日（おつ）の御入りの日なり
（おつ）の御入りの日なり
（おつ）の御入りの日なり
（おつ）の御入りの日なり

十二月十四日

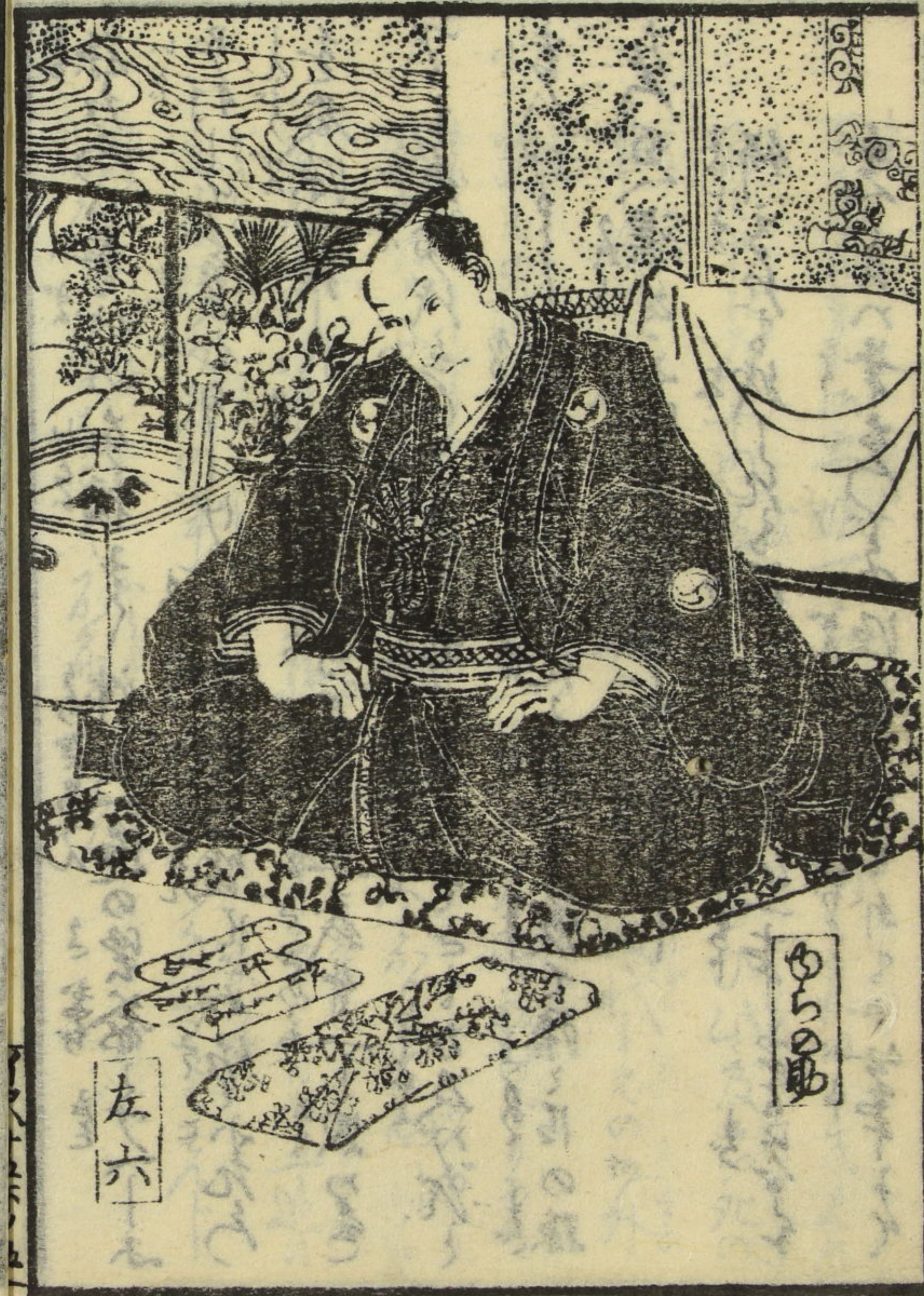
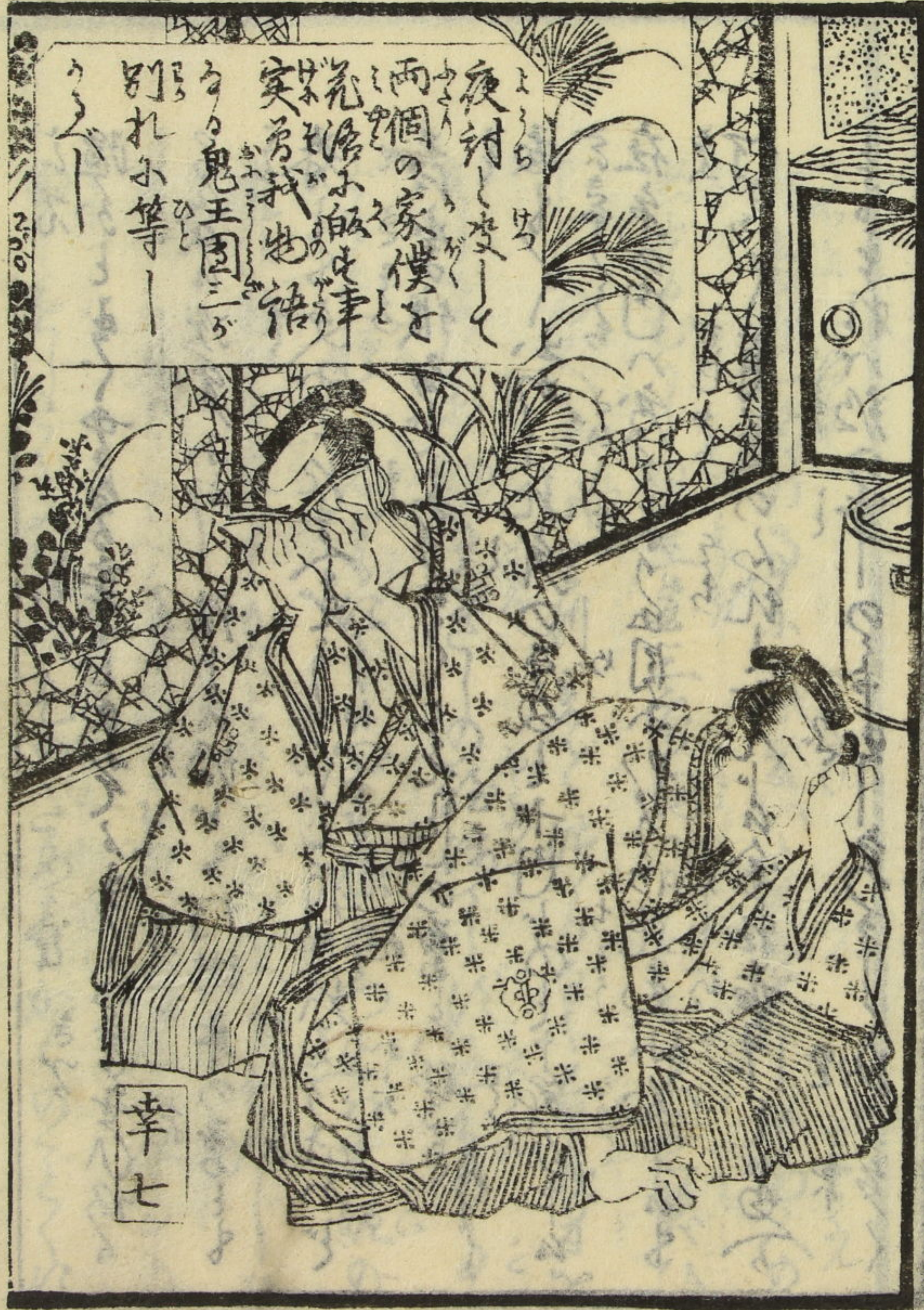
十月

おせんどの

の（おつ）の御入りの日なり
（おつ）の御入りの日なり
（おつ）の御入りの日なり

あらんまゝに安堵をりんらるも同もこれぬるまゝに
初くやむく十月後四一家大勢に掛ひけなせ死の
幸傳おのりく四倍切の心んざ一後代まゝの四外
少しに補ふく一我等一家も大腰抜けどありえ
我等父子同存とを候なる一人にかりある面にも
多た事いりやん家系孫なる事ある言ふ事
元來候死者の事ふしどもそれく印付をもぞんド
候びやん不あぐくある所な候

孫たるの普代の存頼まゝ津及一遍の袋茶子一ふ
如行しとる愛むありけんも奥野お監にむ候もた
を後保四年ふ山原なる考もた正義才一と思ひ
つるも長輪代まゝ立連外せ一夏大星ともわ及び
喜ひけり一堀内氏の事死ふえより死て隣に居る孫
たより傳ふ比をねが物もる変り
併言たも候しれも候しけり取付一事ある事
まゝく入事あるどの原君もあつた事



ふりて飲るとかううーの十内が妻の他おつうとこは
のこはともんまの友知るはあしと知して頼おたんの
身のおりりの姑且後の孫お繕りく次の田よりお神
両頭おちまびとて一く茶後と合せ見え

第九十四

可和七とんお茶ん持てもつらひの之れう茶氣とくまら
うらふまご子王保がまもそ若サ今もく戀くをい
おく可也ひのいとひのとそひ合とて居く小雛嬢氏

イ尺十五下八

おれおれお高松のお庭をよきこのごりのと無今此の
師直とぬのおまが法のとく竹指ざらう初うごらんと
考へてう橋くうのサ子とれもまうわー歳が若くか
那嬢の中お思の是中お口惜いおん歳と子下一寸
まふも嬢姑らく生年く一たお茶の言話の物
思けれどおめうぬ体とく和又解らるいと成る作
まて子茶へアイサねへ解らるいサとぞセ那嬢の松お
種くの産後とあゆく酸も甘いも知とく居る者よ

遠ちかひままとヨトとあり身みふふりりとトとあり也也 和わトとししん
るる後ごととああららるる夏なついいまませんせん松まつがが分わららるるいいとといいて
ののいいまま考かん考かんててもも也也後ごトとははしし小こ雛ひないいとと人ひとのの婚よめををいいまませ
ののいいれれ何なにれれ致いたされれまませせうう若わかきき那あの嬢ぢやうとと清せい曲きよくののあある
ののああららるる能よく令しん雅ぎやがが行いとといいまませせううがが連つれてて行いくくままももああららるる
変かへへ上うささせせんん致いたまませんせん文ぶんとと松まつがが成なり利きとと何なにげげららせせららふ
るるこのこのどどうう清せい曲きよくののああいいゆゆいいりりそそううああららるる思おもひひののをを
行いくくふふ法はふけけとともも女めががああつつるるとと成なりとと作つくららるる解とくららるるいいとと
不ふ口くち五ご下げ九く

中ちゆうこのこのいいままとと業ぎやう 一いつ実じつ西せい小こ夢むううるる妹いののいいけけれれども
行い儀ぎもも疑ぎぶぶいいのの中ちゆうううどどうううういい思おもひひ成なり成なりととこのこのどどうう
憶おぼええししとともも異いヨよ和わとと女めののああららるる解とくけけれれいいままとといいままとと
ままもも松まつ小こ他たののおお使しいいああららるるいいままとといいままとといいままとといいままとと
おお屋やああららるる限かぎとといいままとといいままとといいままとといいままとといいままとと
とといいままとといいままとといいままとといいままとといいままとといいままとといいままとと
おお屋やああららるるのの四よ門もんががああららるるいいままとといいままとといいままとといいままとと
おおららししくく性せいててもも教きやうのの兄あに所しよちちのの者ものああららるるいいままとといいままとといいままとといいままとと

お暇と頂いしく花より喜ぶ 兼つて又とんまを
云々 杉小宮成林セリヨ 和のむねづくはさう
とてお茶成後の内の後見お表向枝ありとてお屋敷の
内閣もお茶お任せ仕置りすと思はくはるのむねづく
笑ひお茶のおさひのさうも小雛様おるゆゑとこれ
とへと親このへ悪うろくヨとさうくはさうとんまも
おまへお茶ともお屋敷へ出入のおあるさうにさうとんま
悪く思はくはさうとんまもヨヨ和七さん行故先書く

お在のむねづくとんまも後が念づくおと揃とも致
くともお茶お呉なま且和七とわんまをさうとんまを
まてお茶おはさうとんまもゆゑとんまの成とんまゆゑ
兼と致とと四付が満りまて兼へしお茶お茶の女房の
お茶お茶のむねづくの成りつと解とたお茶お茶とも
お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶
ヨ和七さんと兼とんまもて人のむねづくとんまも
お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶お茶

先づ人希ぐハ丁寧おこし一も今日の申す所の
附ハ松の言ふ中ふおまひらの変ず和へイ交ハマア
先「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
行「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
お内「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
こよど「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
置「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
イ「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ

ま「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
あ「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
と「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
え「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
ゆ「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
と「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
お「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ
お「あつそう」後「あつそう」も「あつそう」が思今うの如「あつ



為て船まで行くことも云々ハ官方の史官附の御用也
わたくし東と申すもさうでございませうけれども其も
塩谷の浪人ぐを内ふ大甲しりふ人も交りて居る
らうが居候處にて居る様もございませうありませう
ついでに人がございませうと申すも其も交りて大變どが
史館の事候備中へも知らせしむる
るの書がどの様花押をふも紙が滑りて居る
史も何れも思ひませう例の花押を御覧

史館とし丁度候も其の思ひがめると云々候
まじかゝぬと思ひ候へ共候花押を御覧候
處へ封切候へ候下り候候布の中へ其
事候件のも紙と申すも其の件へ備中より
各商成爲る状あり候へ其業へも通候へ
只天幸の物あり候へ其様候へ送る委細の事
相原様へ書候へ候へ其様候へ
しり候へ其様候へ送る一封の書候と云々候

あつたを 葉「まわく」余程志りてきこえなく 秋の
和「の行とも」いふてよまことさういふならるいけれど
更におまの書の字と右所の一件も違ひのよけり
叔父えん 備中へおれん叔父
の和も大抵おまの思ひ
と大違ひの書も指もあつたの行も房考ご
いふてよまことさういふてよまことさういふならるいけれど
やも指のくまも中へ越すていふてよまことさういふならるいけれど
えんといふてよまことさういふてよまことさういふならるいけれど

お附人も極く減りて高の殿極をりて松系指も
さういふてよまことさういふてよまことさういふならるいけれど
指のくまも中へ越すていふてよまことさういふならるいけれど
内中の若かえんる箇もどのおたの今 和七ま
おまの思ひと異なりとさういふてよまことさういふならるいけれど
おまの思ひと異なりとさういふてよまことさういふならるいけれど
おまの思ひと異なりとさういふてよまことさういふならるいけれど

序小松系さぬまに持て渡りて居りて進み
るいりか最の者もあつて入て入る内花の更を
候もた仲居が四條一とら私も同様に
お在るうのふ遠ひるいり傳へて
お花えんがお角ちがるいのでお出る事一の
更しを中ませうが史あてもお内
松大河ふるあつて強くあつて石町の
いも紙も取く来るこのをい
イロハ下下

幸いお花えんう松系は二作て一
やうお花えんう中ませ行は史が先
おられお花えんう葉一とり
も候と持て渡りて進み
い為まの更度史お出る更
お花えんが大事の多紙と
入はその後首へ引掛く
お花えんを和士の始終
イロハ下下

朝鮮の物類を記し、糸と那一を造と欲不後さか味方の手邊に
慈うごく、糸既り物造りけく、正史にける。

朝鮮 牛肉丸 大包金米 中包金米 小包百銅

名法 此菜を人間の根本と云る脾の孫腎の係と補ふ

と才下と云る也諸之痛減治せんとよし此虚弱の人

老小用也ると云る先特をも此法を用ふる者壽を延ぶの

神訓あり世亦終らる兒孫繁はば後居名茶と云

味の上の味と云ん 下名と云ん 深崎氏製衣

正史 實傳 いろはは文庫卷之四十五

YR221T

